

ユネスコ無形文化遺産・国指定重要無形民俗文化財

須成祭の車楽船行事と神葎流し

ガイドブック



蟹江町歴史民俗資料館



須成祭の概要

蟹江町北部の須成（すなり）地区に伝わる須成祭（すなりまつり）。須成は古くから農業と商業を盛業としてきた地域で、須成祭はこの地区の氏神である富吉建速神社（とみよしだけはやじんじゅ）・八剱社（はちけんじゅ）両社の祭礼として行われる川祭りです。

祭りの起源は定かではありませんが、疫病退散を祈願する天王信仰に由来するもので、江戸時代には行われていたといい、400年あまりの歴史があるとされています。

須成祭は、華やかな車楽船（だんじりぶね）の出る行事と、神葎流し（みよしながし）を中心とする神葎の行事で構成されています。車楽船行事は8月第1土曜日・翌日曜日に「宵祭（よいまつり）」、「朝祭（あさまつり）」があり、宵祭ではたくさんの提灯で飾られた菰船（まきわらぶね）が、朝祭では人形を載せた車楽船が、まちの中心を流れる蟹江川に浮かび優美な姿を見せてくれます。

神葎の神事は、川に茂るヨシを刈り、これをご神体として祀り一切の災厄を封じ込めて川へ流し、人々の豊かな生活を祈願するために行われます。朝祭1週間前の「葎刈（よしかり）」で刈られたヨシは、祭りのご神体となり宵祭・朝祭の間神社にまつられ、朝祭の翌日「神葎流し」で災厄を託し流されます。そして、その翌日の「棚上り（たなあがり）」から10月下旬の「棚下し（たなおろし）」まで棚に神葎をまつる行事が続きます。

須成祭には数々の行事があり、最初の行事とされる「稚児定め（ちごさだめ）」から最後の行事の「棚下し」まで100日間あることから別名「100日祭り」とも地元では呼ばれています。

こうした一連の行事が伝統を守り続けられてきており、日本の夏祭りを理解するうえで重要な祭りであるということから、平成24年3月8日、国指定重要無形民俗文化財となり、平成28年12月1日（日本時間）には、「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産への登録が決定されました。

ユネスコ無形文化遺産とは

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関です。（ユネスコ憲章前文より）

無形文化遺産の保護に関する条約（無形文化遺産保護条約）は、平成15年（2003年）ユネスコ総会において採択、平成18年（2006年）に発効しました。日本は平成16年（2004年）に世界3番目という早さでこの条約に締結しています。

無形文化遺産は伝統芸能や伝統工芸技術などの無形のもを対象に、文化の多様性やそれに関わる人々の行為や継承の課程を認めるものです。無形文化遺産保護条約は、締約国に対して無形文化遺産の目録を作成することを求め、ユネスコにおいて「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表（代表一覧表）」及び「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表（緊急保護一覧表）」を作成することなどを定めています。日本からは、能や歌舞伎、和紙や和食などが登録されており、中国に次いで2番目に多い登録数を誇っています。

須成祭のユネスコ無形文化遺産登録への歩み

須成祭がユネスコ無形文化遺産登録に至るには、文化財としての歩みがありました。その経緯は以下のとおりです。須成祭は、長期に渡り数多くの行事が行われることが一つの特徴ですが、その歩みをみると、17の祭事が町指定無形民俗文化財に指定されることに始まります。国指定、ユネスコ登録に関しても、「須成祭の車楽船行事と神葭流し」の名称で指定・登録されることになり、その特徴があらわれています。

昭和 53 年 8 月 須成祭の 17 の祭事が町指定無形民俗文化財となる。

昭和 55 年 2 月 町指定となった 17 の祭事のうち葭刈・宵祭・朝祭が県指定無形民俗文化財となる。

平成 14 年 2 月 須成祭全体が国から「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択される。

平成 18～22 年度 須成祭記録作成事業を実施。『須成祭総合調査報告書』および「映像記録 DVD」発行、文化庁に提出。

平成 24 年 3 月 「須成祭の車楽船行事と神葭流し」が国の重要無形民俗文化財に指定される。

平成 26 年 3 月 国が、「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産提案を決定。

平成 26 年 6 月 ユネスコ無形文化遺産提案件数多数ため審査が 1 年延期される。

平成 27 年 3 月 国が 33 の祭りを「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に再提案。

平成 28 年 10 月 ユネスコの政府間委員会の評価機関による事前審査、勧告。

平成 28 年 12 月 ユネスコ無形文化遺産への登録決定。（現地時間 11 月 30 日）

山・鉾・屋台行事とは

ユネスコ無形文化遺産への提案書によると、「山・鉾・屋台行事」について、次のような内容が述べられています。

「山・鉾・屋台行事」は、地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となって執り行うもので、各地域の文化の粋をこらした華やかな飾り付けを特徴とする「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした祭礼行事である。また、行事の際には、「山・鉾・屋台」の巡行のほか芸能や口承が披露され、それに向けて地域の人々が年間を通じて準備や練習に取り組んでいることから、「山・鉾・屋台行事」は、各地域において世代を超えた多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしている。さらに、「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産代表一覧表への記載は、コミュニティが参画した持続可能な方法での無形文化遺産の保護・継承の事例として、国際社会における無形文化遺産の保護の取組に大きく貢献するものである。

須成祭の諸役

須成祭の保持団体は、須成文化財保護委員会です。須成文化財保護委員会は、須成敬神会、須成区会、須成鼓笛（こてき）保存会で構成され、敬神会長、区長、鼓笛保存会会長が村方三役として祭り行事を監修します。そして、祭りの役者は、基本的に、毎年新たに選出されます。宿大将 1 名、祭総代 2 名の祭三役は、祭の主宰者として祭りを熟知している者が選ばれます。若衆は、二十歳を過ぎた若者が務めるとされています。稚児は、年齢順に役が決められ、おおむね一稚児（いちちご）・二稚児（にちご）は 3～5 歳、一なす・二なすは 6～7 歳、太鼓は小学校 3～5 年生、楽（がく）は小学校 5～6 年生の子が務めます。笛吹は技術が必要なため、鼓笛保存会で笛を習得した者が務めます。

主な祭り役者

役名等		人数	主な役割等		衣装	
祭三役	宿大将	1名	祭りの主宰者		袴・一文字笠	
	祭総代	2名				
若衆	桜花 きくらげな	1名	祭りの責任者	基本的に山乗を兼務する	宵祭：浴衣 朝祭：黒羽織	
	桜次 きくらげ	1名	祭りの副責任者			
	車大将 のぼ (上り袴・残り袴)	2名	船祭りの責任者		袴	
	山乗	6～8名	祭船りの屋根上に乗る		宵祭：浴衣 朝祭：黒羽織	
	鼓刈 よしかり	原則6名	神護神事 みよしし に関わる行事を担当		白装束	
稚児	一稚児	1名	神のよりましとしての存在	それぞれ の稚児に 親役や供 がつく	稚児衣装・狩衣(緑)・冠(桜)	
	二稚児	1名			稚児衣装・狩衣(緑)・冠(梅)	
	一なす・ 二なす	各1名	祭囃子 おど の大鼓を叩く		稚児衣装・狩衣(紫)・冠	
	太鼓	1名	祭囃子の小太鼓を叩く		6～8名	稚児衣装・狩衣(白)・冠
	楽 がく	1名	祭囃子の太太鼓を叩く			稚児衣装・袴(白)
	笛吹	1～3名	祭囃子の笛を吹く		袴	



車楽船行事の役者たち（令和 5 年）

須成祭の行事

須成祭は 100 日祭りとも言われ、その起点は全ての祭り役者が決まる「稚児定め（ちごさだめ）」だとされていますが、祭りの準備はその前から進められています。各行事等の日程と内容は次のとおりです。

須成祭日程表

日程	車楽船行事(●)	神葎流し(■)
6 月中旬	三役・若衆会議	
6 月下旬～	諸準備（梅花 ^{うめばな} ・桜花 ^{さくらばな} 作り等）	真菰刈り等
朝祭 2 2 日前	稚児定め	
朝祭 1 4 日前	多度大社参拝 宿入り	
朝祭 1 3 日前	稽古始め	
朝祭 7 日前の早朝までに		葎刈準備
朝祭 7 日前	船がらみ（船の組み立て）	葎刈
朝祭約 5 日前		葎ぞろえ
朝祭 3 日前までに	人形飾り	
朝祭 3 日前	稽古上げ	
8 月第 1 土曜日 (宵祭)	みそぎ 天王参り・三寺参り 宿囃子・祭船の運行	真のご神体を立てる
8 月第 1 土曜日の翌日 (朝祭)	山起し 祭船の運行・天王囃子 山下し	
朝祭 1 日後		神葎流し
朝祭 2 日後		棚上り
朝祭 2 日後～7 6 日後		御神葎様参り（神葎祭り）
朝祭 4 1 日後		中湯立て
朝祭 7 7 日後		棚下し

●■三役・若衆会議

6 月中旬、その年の祭りの運営を担っていくことになる、祭三役、村方三役、若衆が集まり、顔合わせと諸確認を行います。

●榎（えのき）切り

6 月下旬頃、朝祭の車楽船を飾る梅花（うめばな）の材料となる榎の枝を切り出す作業をします。榎は須成区内各所に自生している木を探し、



榎木切り

事前に見当をつけておいて切りに行きます。2m程の枝が8本は必要で、それに加えて何本もの枝を切り落とします。切った枝は葉が着いたままの状態、しばらく乾燥させておきます。

●榎の葉落し・花台づくり

梅花作りのために切っておいた榎は、2週間ほど干しておいて葉がカラカラになった頃、葉落としをします。葉を落とした枝は、須成公民館の駐車場に運び、船に飾るために格好良く枝を組み立てます。十字型の土台に枝を差し、専用のゲージで大きさや枝ぶりを見て小枝を足して仕上げていきます。梅花は、船に載せるもの8本、それより小ぶりの宿に飾るもの1本を作ります。



榎木の枝を乾燥させる



梅花の花台作り

●稚児定め

「稚児定め」は朝祭の22日前(宵祭の3週間前の土曜日)の夜に行われます。この行事で、役者衆を務める子どもが正式に決まります。

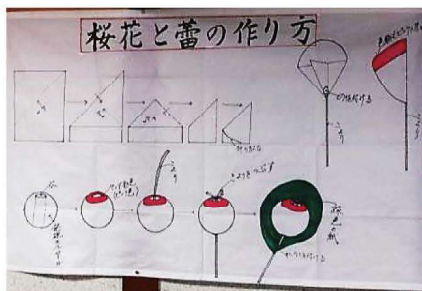
神社の社務所に祭三役、村方三役、敬神会役員、若衆が集まってから、提灯を持った若衆と、担当役員が候補者の家に出向き、若衆が玄関先で三つ指をついて、「今年は祭り番があたりまして、役者衆をお願いに参りました。どうかよろしくお願いします。」などと言ってお願いをします。承諾を得られれば、宿入りの案内をしてその家を後にし、次の家に向かいます。すべての依頼・承諾が済むと、神社に戻り祭三役に若衆が結果を報告して行事は終了します。



稚児定め

●桜花(さくらばな)の準備

7月中旬頃、朝祭の車楽船の屋根の正面に載せる桜花の花弁と蕾を作る作業が始まります。花弁は、四角い和紙を折りたたんで三角にし、一边を丸く切り、尖った部分にこりをつけて作られます。後日、赤い食紅を水に薄めたものに先端をひたして色づけし、完成させます。蕾は、発砲スチロールの玉の先をピンクに塗り、こりをつけ、緑色の和紙をつけて完成させます。



桜花作りの手順

■真菰（まこも）刈り

7月下旬にさしかかると、葎刈（よしかり）の縁起物である「ちまき」に使うマコモを刈る作業をします。マコモは水辺に生える植物で、その葉を縄にして、その先に小さな餅をつけたものを「ちまき」とよび、このちまきの餅を食べると「夏病みしない」とされています。以前は自生しているマコモを刈っていましたが、今は区内の水田で栽培されたものを刈っています。刈ったマコモは公民館に運び、よく水洗いをしてから枯れた葉や袴を取り、束にして干しておきます。



マコモを干す

●多度大社参拝

朝祭2週間前の「宿入り」に先立ち、その日の午前中に若衆と祭三役、村方三役が多度大社に参拝して船祭りの晴天を祈願し、お札をうけてきます。祭り宿となる須成公民館には多度大社分霊として臨時の神棚が設置され、そこへお札を安置します。宿入り以降、祭りの準備等で宿に入る時は、まず多度大社分霊に参拝してから準備等に入ることになります。



多度大社分霊

須成祭では、祭りの晴天を切に願う傾向が強く、宵祭当日の「みそぎ」では多度大社を遙拝し、最後に宿の分霊に参拝する場面があります。

船祭りが無事済むと、棚上り（たなあがり）の後に多度大社までお礼参りに行き、お札は納められます。



宿入り式

●宿入り

朝祭の2週間前、須成祭の諸役が初めて宿に入る「宿入り」が行われます。須成祭の宿は、須成公民館のホールに設けられます。宿入り式直前には公民館の別室で6名いる役者衆（稚児）の役決めがされ、年少者から順に一稚児、二稚児、一なす、二なす、太鼓、楽（がく）の役につくことが伝えられます。



宿の入り口に注連縄を張る

宿入り式では、稚児は浴衣、村方三役は着物、祭三役や稚児の親役は着物に黒羽織という姿で、船で

祭囃子を演奏する時と同じ配置で座ります。部屋の脇には敬神会と鼓笛保存会の役員が座して見守ります。若衆が進行役を務め、区長、敬神会長の挨拶の後、祭囃子を一通り演奏し、鼓笛保存会会長が総評を述べて終了となります。この直後に宿の入り口には注連縄(しめなわ)が張られ、入った側の壁の上方には祭り役の名前が張り出されます。

この時から須成公民館のホールには結界ができるため、基本的に関係者以外は入ることができなくなります。また、この日から毎晩、公民館の外に設置した柱に宿提灯が点灯され、祭りに向けての準備がいっそう本格化します。



宿提灯

●稽古始め

宿入りの翌日の夜「稽古始め」があります。練習に参加する役者らは浴衣を着て集合します。祭総代は部屋の内側を向いて様子を見守り、その他の者は船に乗った時と同じ配置に座り、大鼓(おおど)を叩く「なす」や、小太鼓を叩く「太鼓」、大太鼓を叩く「楽(がく)」は鼓笛保存会指導者の手ほどきをうけながら稽古をします。

須成祭囃子は、一曲のみですが、演奏する場面によって「宿囃子」「天王囃子(てんのうばやし)」などと呼ばれます。前・中・後と呼ばれる部分があり、前と中の演奏と後の演奏の二つに分けて稽古をします。稽古始め以降、祭囃子の稽古は5～6日間程度行われます。



祭囃子稽古

●花つけ

7月下旬、梅花の花台に和紙の花をつける作業が行われます。公民館の駐車場で、花台の榎の枝に型で抜いた和紙の梅の花を糊で貼り付けていきます。和紙の花は赤と白があり、交互にバランスよくつけていきます。この作業は、敬神会や区会、鼓笛保存会のほか、老人会にも担当が割り振られ、数日間にわたって行われます。



花つけ

■ちまき用の縄(な)い

梅花の花つけ作業と前後して、ちまき用の縄を



ちまき用の縄を綯う

縄う作業が行われます。刈って干しておいたマコモの葉を少し湿らせてから、2〜3本の葉をとり、真ん中で折り返して左縄に縄っていきます。かつては葭刈の前日に縄を縄ってその先に餅を付けて完成させていましたが、ちまきを作る数が増えたため、事前に縄を作っておき、前日に餅をつけて完成させています。

■葭刈（よしかり）準備

葭刈の前日、葭刈に必要な物を取りそろえるなどして準備を整えます。葭刈舟として使う小型の舟はきれいに洗っておきます。また、午前中に「ちまき」を完成させる作業をします。縄っておいたマコモの縄の先に、長さ約5cm、厚さと幅が1cmほどの小さな餅を挟んで仕上げます。

葭刈当日の早朝、もち米を蒸して型に入れて「鳥の子」を作ります。鳥の子は白と黄のものを作り箱に詰め、立ち寄り先への手土産とします。このほか、神事に使う三方や酒など必要な道具等をそろえて出発に備えます。

■葭刈

朝祭の1週間前、祭りのご神体となる神葭（みよし）を作るためのヨシを刈りに行く「葭刈」が行われます。

朝、葭刈役の若衆が白装束に身を包み、神社で参拝をしてから葭刈舟に乗り込みます。葭刈舟は手漕ぎの小さな舟で、竹竿を操作して進みます。舟は天王橋の北から出発し、若衆がちまきを投げ、河口へと下っていきます。このちまきを受け取り食べると「夏病みしない」といわれています。下っていく際には若衆の1人が舟の上で太鼓を叩いて通過を知らせます。

しばらくすると宮司と祭三役・村方三役らが出発し、下流で役員のポートと葭刈舟が合流します。近年は河口手前の舟入の水辺スポットで舟入区民の歓迎をうけ、あいさつを交わしてから休憩し、葭刈場へ向かいます。葭刈場は日光川の堤防沿いで、日



ちまき



鳥の子



ちまきを投げる若衆



蟹江川を下る葭刈舟



舟入水辺スポットでの歓迎

光大橋の少し下流のヨシが生い茂っている場所です。舟を着けると、笹竹を立て注連縄を張り、神事を行ってからヨシを刈ります。葭刈舟にヨシを積み込み帰路につき、蟹江川に入ると河合小橋の下で昼食をとってから蟹江川を上り帰着、ヨシを神社の境内に運んで解散となります。



神社に運び込まれたヨシ

●大注連縄起し（おおしめなわおこし）

葭刈の日、若衆らが葭刈に出発すると、見送った者たちは宿である須成公民館の入り口に笹竹を立て、大きな大根締めめの注連縄を設置します。これを大注連縄起しといいます。注連縄は朝祭が終わるまで飾られます。



大注連縄起し後の宿

●船がらみ

葭刈の日の午後、祭船の組み立て作業が行われます。台船は、幅約 2.6m、長さ約 15mの鋼鉄船を平行に 2 艘並べたもので、普段は蟹江川の神社の隣に係留されていますが、この日までに宿である須成公民館の前まで移動され、そこで作業が進められます。台船の上に組み立てられる屋形は二階造りで、公民館の収蔵庫に部材が納められており、役員らがそれの一つずつ運び出し、土台を組み、柱を 8 本立て、床を張って組み立てていきます。ただし、舞台の手すりなどの漆塗りの部分は雨に濡れると傷むのでこの時ではなく祭り直前に取り付けられます。



舞台の柱を立てる

屋根から上の作業はクレーンを使い進められます。屋根をかぶせ、その上に大屋台、小屋台が載せられ、大屋台の上には巻藁提灯（まきわらちょうちん）をさす巻藁台が設置されます。かつては巻いた藁に提灯をつけた竿を差して飾ったそうですが、現在は鉄製の枠に竿を差すようになっています。最後に、長さ約 15.5mの真柱（しんばしら）が立てられます。組み上がると巻藁船全体の高さは約 20mにもなります。



クレーンで真柱を立てる

●柳切り・桜花の花つけ

車楽船の上に飾られる桜花は祭りの6日ほど前に完成させます。桜花は枝垂れ桜のように仕上げるので、柳の枝を使いますが、柳は乾燥すると折れやすくなるため、この時期に準備します。柳の枝を切ったら、すぐに葉を落として須成公民館に運びます。公民館では、土台に枝を差しして花台を作り、準備しておいた花弁と蕾を枝につけて仕上げていきます。桜花は、車楽船の屋根の正面に飾るもの1つと宿に飾る小ぶりのもの1つを作ります。

■葎揃え

宵祭までに、祭りのご神体となる「神葎」を作る作業が行われます。役員総出で、葎刈で刈ってきたヨシの下葉や袴を取り除いて整理し、編み台で葎簀(よしず)を作り、それで束ねたヨシを巻き、下から七回、五回、三回ずつ縄を巻くと、直径約30センチ、高さ約2.5メートルの神葎が完成します。神葎は4本作られ、神社の祭文殿(さいもんてん)に納められ、その前には獅子頭と絵馬が飾られます。

●諾冊二尊(たぐさいにそん)飾り

朝祭の3日ほど前、朝祭の車楽船に載せる人形を宿である須成公民館に飾ります。人形は伊弉諾尊(いざなぎのみこと)、伊弉册尊(いざなみのみこと)の男女の神様であるとされ、諾冊二尊と呼ばれています。そのため厳格に扱われ、特に面をつける時には、塩で清めをし、息がかからないように和紙で口元を覆ってから臨みます。人形は、部屋の正面の台の上に飾られ、宿にある間は、面を白紙で覆った状態にされます。両脇に行灯、向かって左に梅花、右に桜花が飾られます。また、正面には三方が置かれ、上方には注連縄が張られます。

この日から祭りの前日まで、船の真柱には提灯が二つ灯され、宿では若衆が泊まり込んで人形の番をし、祭り本番を迎えます。



完成した桜花



ヨシの整理をする



葎簀を作る



縄を巻く



宿に飾られた人形

●稽古上げ（けいこあげ）

諾冊二尊を宿に飾った日の晩、「稽古上げ」が行われます。稽古上げでは本式の楽器を用い、祭総代も部屋の外を向いて座り船に乗った時と同じ配列になり、本番さながらに囃子を一通り演奏して終わります。このあと祭り本番にむけての最終確認がされ、解散となりますが、若衆は人形の番をするために宿に残ります。



稽古上げ

●祭り直前の準備

宵祭の日の午前中、天王橋（てんのうばし）に提灯や鳥毛などを立てて飾り、船には幕や行灯を掛けるなどして、準備を整えます。

●みそぎ

宵祭当日の正午、稚児以外の祭船に乗る者たちが水を浴びて身を清める、みそぎを行います。かつては蟹江川でみそぎをしていましたが、現在は水を浴びて行っています。役者たちは公民館の前に整列すると水を浴びてから出発し、御葎橋を渡り北上、天王橋付近の視界が開けたところで多度大社へ向かって参拝した後、神社へ行き水を浴びてから参拝、宿に戻ると多度大社分霊と諾冊二尊の人形に参拝して解散となります。



みそぎで水を浴びて御葎橋を渡る

●天王参り

「天王参り」は、宵祭に先立ち祭船に乗る者全員が神社に参拝する行事です。役者たちは祭りの衣装に身を包み宿の前に整列して行列を作ります。祭り総代二名、その次に宿大將、続いて一稚児、二稚児、一なす、二なす、太鼓、楽の一行が並び、その後ろに笛吹、そして若衆が最後につきます。行列は、公民館の前に南向きに整列すると、先導の役員に続いて出発、すぐに左折して東に向かい堤防の坂を下りると左折して公民館の東の道を北上、県道へ出ると左折して神社へ入ります。稚児は赤い振り袖に豪華な刺繍を施した衣装を身につけ、地に足をつけないように肩に乗せられて進みます。



天王参り



鼓笛保存会による神子太鼓の演奏

神社では鼓笛保存会が演奏する神子太鼓(みこだいこ)で迎えられて拝殿に入り参拝、参拝が終わると神子太鼓で送られ出て行きます。

●寺参り

天王参りの後、稚児の一行が須成区内の全ての寺に参る寺参りが行われます。天王参りを済ませると記念撮影をし、笛吹と若衆はここで解散、残りの者は神社を出ると隣の龍照院(りゅうしょういん)に行き、龍照院を出ると天王橋を渡り南下して松秀寺(しょうしゅうじ)へ行き、その後、飾り橋を渡り善敬寺(ぜんきょうじ)へ行き公民館に帰り解散となります。各寺では一稚児の親が稚児を代表して祝儀を住職に渡し、住職からはお菓子が各稚児に渡されます。

■真のご神体の安置

宵祭当日の夕方、宮司が神社にやってくると、「真のご神体」と呼ばれる御幣を作ります。この御幣には葎刈で刈ってきたヨシが二本つけられます。宮司はこれを完成させると富吉建速神社の本殿の中に納め、それまで1年間本殿で祀られてきた御幣を出して祭文殿にある神葎の中央に立てます。こうして神葎は「御神葎様(おみよしさま)」として祭りの間安置されます。

●宵祭

祭りの全ての準備が整い、辺りがすっかり暗くなった頃、宵祭のはじまりとなります。神社境内には出店が並び、奉納太鼓の舞台では須成鼓笛保存会をはじめ、蟹江町内の神楽太鼓の伝承団体が奉納太鼓を叩き振わいます。祭船は夕方、御葎橋(みよしばし)のところで少し下流の飾橋(かざりばし)のところまで移動され、暗くなると舞台の周りの行灯や真柱の提灯への点火を始め、出船に備えます。

午後7時30分、祭り宿で「宿囃子(やどばやし)」を演奏します。また、神社では宵祭の神事が始まります。囃子の演奏が始まると、車大將(上り袈(のぼりかみしも))が、宿に飾られている人形の両脇にある行灯の一方を持ち出して飾橋にある祭船まで届けます。この行灯は



寺参り



御神葎様



境内のにぎわい



宿囃子



上り舳が行灯を船に届ける



巻藁提灯の点灯



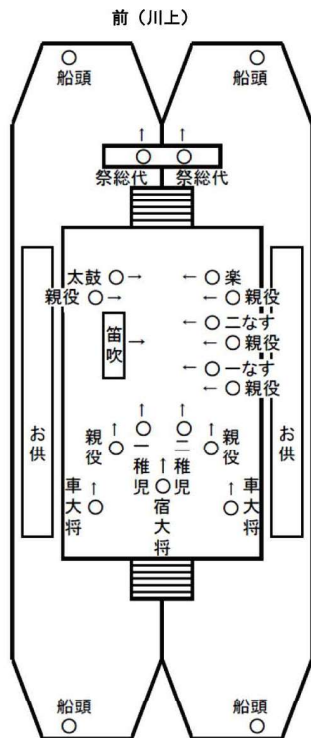
巻藁船と上がる御蔭橋

宿囃子が始まったことを船に知らせる役目をするもので、舞台の正面の柱に掲げられ、船ではいよいよ巻藁提灯の点火が始まり、出船に備えることになります。宿囃子の演奏が終わると、祭り役者らは宿から出て行列をつくり整列します。行列の並びは天王参りと同じですが、宵祭では各稚児の前に高張提灯が付きまゝ。一行は飾橋まで堤防を進み船に乗り込みます。稚児や親役、笛、宿大将、車大将は舞台の上に座し、祭り総代は舞台の前の船の先頭に座ります。山乗りは屋根の上に乗る、稚児の供は船の両脇に位置します。

出船の準備が整うと、船の前方で銀滝花火（ナイアガラ）と金魚花火が点火され、それが終わると囃子を演奏しながら船が出発します。上部では巻藁提灯を半球形に飾りながら進み、正面のほおずき提灯も点火され、御蔭橋手前で巻藁船の飾り付けが完成します。巻藁船の真柱（しんばしら）の提灯は一年の月数、巻藁提灯の数は一年の日数、正面のほおずき提灯は一月の日数をあらわしているとされています。



須成地区蟹江川周辺地図



船中の配置図

船は飾橋を出発し、天王橋まで進むため、その間にある御葎橋に近づくと、ゆっくりと御葎橋の橋桁が上げられます。この御葎橋は、須成祭のためにだけ上げられる跳ね橋になっています。船が橋の手前で待機すると仕掛け花火が点火され、それが終わるとゆっくりと船は進み橋を通過します。船では、これに合わせて囃子の後半の部分を演奏して情景を盛り上げます。天王橋の手前で銀滝花火と金魚花火があり、橋までたどり着きます。その後、橋の北側から花火が打ち上げられ、宵祭は終了となります。船は、天王橋の少し下流の船着き場「深田のこいど」に着けられ、ここで役者たちは下船し解散となります。

●山起し (やまおこし)

宵祭が終わると、巻藁船は宿の前まで移動され、すぐに提灯が外されます。そして、深夜に「山起し」が行われます。クレーンを使って提灯台をはずして屋台を組み替え、人形を安置する場所には屋根を乗せます。役員たちは部材を運びつつ様子を見守ります。人形は伊弉諾尊、伊弉册尊の男女の神様であるとされるため、清めを済ませた半裸の若衆が仰向けに背負って運びます。かつては橋から船へ板を渡してそこを昇って運んだそうですが、今はゴンドラで釣り上げて安置します。幕なども朝祭の装いにされ、人形が梅花・桜花で囲まれると山起しは終了します。



山起して人形を運ぶ若衆



ゴンドラで人形を船に載せる

●朝祭

朝を迎えると朝祭の始まりとなります。船は飾橋に移動され、午前9時、宿の前に役者たちがそろって行列を作り飾橋にある船に向かい乗船します。準備が整うと、囃子を演奏して出発、御葭橋を通過し天王橋までたどり着くと、少し戻ったところにある船着き場「西のこいど」に一旦着岸します。ここで稚児たちは下船し、行列をつくり天王橋を渡り、神社拝殿に入り囃子を一通り演奏します。これを「天王囃子」と呼んでいます。

船では、天王囃子が終わる頃、屋根の上に飾られている梅花や桜花の枝を若衆が投げる「投げ花（上げ花の儀）」が行われます。梅花や桜花の枝は、家に飾ると夏病みしない、雷が落ちない、良縁に恵まれる、などと言い伝えられています。

稚児たちは、天王囃子を終えると拝殿を出て行列をつくり神社を後にし、天王橋を渡って再び乗船します。船は少し下流へと向かい「深田のこいど」に着くと役者たちは下船して朝祭は終了となります。



申楽船（朝祭）



天土囃子



下船する役者たち

●山下し（やまおろし）

朝祭が終了すると船は公民館の前に戻り、午後から山下しが行われます。役員らの手によって船が解体され車楽船の行事が終わります。船は台船のみになり、後日、元あった神社の隣の場所に戻されます。



山下し

■神葎流し（みよしながし）

朝祭の翌日早朝、「神葎流し」が行われます。神葎流しは一切の災厄を封じ込めた「御神葎様」を川へ流す行事です。夜明け前の辺りがまだ暗い中、拝殿で神事が行われます。神事が終わりと日が昇ってくる頃、白装束を着た葎刈役の若衆が祭文殿の神葎を一束ずつ担いで本殿の前に並び、行列をつくり葎刈舟まで運びます。4本の神葎は、二つずつ束にし、それを上下にして十字に組み、中央に真のご神体を立てて、蟹江川に流します。かつては実際に放流し、流れ着いたところで祀ったそうですが、現在は葎刈舟で曳いて辺りを一周してから、川の中に留め置かれます。



神葎を担ぐ若衆



神葎流し

■棚上り（たなあがり）準備

「棚上り」の前日に、棚の準備をします。棚は、神社の社務所の前の堤防に近い場所に東を向くかたちで設置します。鉄の骨組みを組み立て、棚の側面と後ろを囲むように竹を立て棚の上部の側面と後ろには葎簀をさげます。棚の北側は、御神葎様の引き上げ口となるため、葎簀はさげず、立てた竹も上部を固定しないようにしておきます。



蟹江川に留め置かれた御神葎様

■棚上り

朝祭の2日後の朝、御神葎様を神社境内の棚に祀る「棚上り」が行われます。白装束を着た葎刈役の若衆が神葎を引き上げ、棚に川にあったのと同じ状態に組んでまつのです。このとき神葎は棚の正面ではなく北側から上げられます。上げ口だったところに葎簀をさげ竹を固定し、正面に注連縄を飾り、棚の前には参拝のための賽銭箱を兼ねた灯明台が置かれます。こうして棚が整うと、棚上り神事が行われます。この日から75日間、御神葎様は棚の上でまつられます。



棚上り

●多度大社お礼参り

棚上り神事後、三役と若衆は、宿にあった多度大社分霊のお札を持って多度大社にお礼参りに行きます。

■御神葎様参り

棚上りが終わると須成地区の住民は毎日交替で当番の者が、「御神葎棚」に参拝します。この御神葎様参りは棚下しの前日まで続けられます。



御神葎様の棚

■中湯立て（なかゆだて）

9月中旬、棚上りと棚下しの中間の日に「中湯立て」の神事が行われます。棚の前に祭壇を設け、湯を献じて神事をするのです。朝、葎刈役の若衆、祭三役、村方三役、敬神会役員らが集合し棚の前に整列すると、宮司による祝詞奏上の後、玉串奉奠をして終了します。



中湯立て神事

■子供獅子の奉納

10月の体育の日、須成地区の秋祭りが行われます。この日の午後には、秋祭りで出される区内各地区の子供獅子が富吉建速神社・八剱社にやって来ます。子供獅子が境内に到着すると獅子頭が拝殿の前の台の上に並べられ、子どもたちはその前に整列します。皆揃うとあいさつの後、拝殿に向かって参拝すると、続いて御神葎様に向かって参拝をします。この後、子供獅子は区内の神社を巡ります。



子供獅子の奉納

■棚下し（たなおろし）

10月下旬、朝祭の77日後に「棚下し」が行われます。午前9時より、葎刈役の若衆、祭三役、村方三役、敬神会役員らが参列して棚下しの神事が行われます。その後、75日間祭られてきた御神葎様を棚から下ろし、境内の穴で燃やします。真のご神体も、結びつけられた葎や御幣などを外し、心棒のみ残して燃やされます。心棒は次の年のご神体に使用するために保管されます。棚は解体され、竹などは燃やされ、骨組みは収納されます。

こうして棚下しを終えると、須成祭全ての行事が終了することになるのです。



棚下し

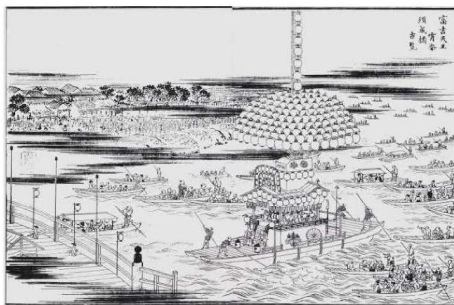
須成祭の歴史と継承

須成祭は、須成区の氏神である富吉建速神社（とみよしたけはやじんじゃ）・八劔社（はちけんしゃ）の祭礼として行われています。両社の祭神は、富吉建速神社が素戔鳴尊（すさのおのみこと）、八劔社が天照大神（あまてらすおおみかみ）、素戔鳴尊、日本武尊（やまとたけるのみこと）、宮簀媛尊（みやすひめのみこと）、建稻穗尊（たけいなだねのみこと）の熱田五神で、富吉建速神社はかつて「天王さん」と呼ばれていました。両社の草創は定かではありませんが、社伝によると、創立は天平5年（733）までさかのぼるといいます。また、両社の本殿は室町時代の建築様式を残しており、国の重要文化財に指定されています。

須成祭の歴史については、天保元年（1830）の「八劔宮・富吉天王社祭礼等書上」によると、上古より毎年6月17・18日に鎮疫病、天下泰平、五穀豊穰、などを願い行われてきたといい、天文17年（1548）には織田信長が神社を再建し、その際「夏六の祭典転退無之様に」と伝えたといっています。さらに豊臣秀吉も文禄年間（1592－1596）疫病が流行した際に参拝し「後世と雖も催事を忽にする莫」と伝えたとされています。さらに、神社の西に大池があり、そこに船を渡して行っていたが、承応年間（1652－1655）に蟹江川が開削され池がなくなり、蟹江川で行うようになったと記されています。織田信長や豊臣秀吉の関与はそれ以前の記録が確認できないため、定かではありませんが、400年あまりの歴史があると想像できます。公式の古い記録では、寛文年間（1661－1673）にまとめられ



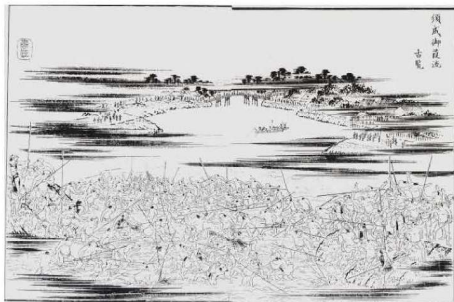
富吉建速神社本殿(右)・八劔社本殿(左)



『尾張名所図会附録』富吉天王宵祭須成橋古覧



『尾張名所図会附録』富吉天王



『尾張名所図会附録』須成御蔭流古覧



「須成祭之図」(須成祭絵巻)

昭和 13 年(1938)

富吉建速神社・八剱社蔵



⑤ 寺社奉行・御目付・勘定奉行・佐屋陣 屋等天王橋上出張警固	④ みそぎ後の 神社参拜	③ 神祭当日 蟹江川でみそぎ	② みそぎ宿元出発	① 旧6月13日葭刈
--------------------------------------	--------------------	----------------------	--------------	---------------

⑥ 旧6月17日天王参りの行列

⑩ 旧6月17日宵祭山車 と観客雑踏	⑨ 旧6月17日宵祭	⑧ 祭囃子	⑦ 神子太鼓
--------------------------	---------------	----------	-----------

⑭ 旧6月25日棚上りから 旧9月9日まで神葭祭り	⑬ 旧6月18日祭り終了後 深夜2時神葭流し	⑫ 旧6月18日朝祭神事前	⑪ 旧6月18日朝祭山車 飾橋出発
---------------------------------	------------------------------	------------------	-------------------------



た『寛文村々覚書』に「天王祭礼毎年六月十七日夜試楽有
翌十八日二車一輛当村氏子より船にて渡入、近所より馬を
渡入」と記されています。また、江戸時代末期に編集され
たという『尾張名所図会附録（小治田之真清水）』にも須
成祭の様子が描かれています。

須成祭はどのようにして行われるようになったのでしょ
うか。地元の伝承によると、かつて須成の若者が津島のおみ
よし様を、芋の葉をかぶってこっそりと迎えに行き、始めた
のだという説があります。それがいつごろのことであったの
か、実際にそうだったのかは不明ですが、いずれにしても、
津島に倣って行うようになったというのは、確かでしょう。

須成祭の神葎流しは『尾張名所図会附録』の「須成御葎流古覧」にも描かれていますが、
絵図を見ると、流した御神葎様を下流で大勢の人々が奪い合っています。須成の若者が津島
のおみよし様を迎えようとしていたのと同様、須成周辺の地域の者たちが須成の御神葎様を
競って迎えようとしていたのです。

神葎放流については、今は行わず、神葎流しで川面を一周させてから、川へ浮かべてお
き、1週間後に引き上げて棚に上げ、祭っています。では、いつから地元で祭るようになった
のでしょうか。明治20年（1887）の「富吉建速神社・八剱社祭事規則」を見ると、当
時は神葎を放流し、村内に流れ着いた場合は地元で棚に上げ75日間祭り、他村に漂着した
場合、そこで祭るかどうかはその村の信仰に任せ、該村が祭らない場合は地元で祭り、漂着
前に招致したいとの依頼があればそれに対応するとしています。この後に作られたと思われ
る「須成祭改正規則案」では、神葎放流後、基本的に蟹江川に留め置き、その後、棚に祭る
とするが、他村から招待の希望があれば協議のうえどうするか決めるとしています。このこ
とから、放流して他村で祭りをしていたのが、明治後期以降、周囲の村の対応の変化によ
り、地元で祭る現在のやり方へと移行していったといえます。ただ、蟹江川のような流れの
緩やかな川では、明治20年の規則にもあるように、昔から自村に漂着することもあったと
考えられ、現在のように地元で神葎を棚に祭ることは決して新しいことではなく、伝統に基
づいたものであるとも考えられます。

須成祭は、周囲の変化に対応しながらも伝統を守り伝えられてきました。時代に合わせて
何度も祭事規則が改正されるとともに、祭の詳細を記録し後世に伝える努力がされてきた
た。須成祭が文化財指定となっていく課程では、保持団体の組織編成にも変化がありました。
戦後、須成敬神会が運営主体となり、それに区会が関わって実施されていましたが、昭和50
年には祭囃子の継承のため、区内内部に鼓笛保存会ができ、さらに昭和54年に須成祭を含
めた、地域の文化財保護を目的とした組織として、須成敬神会、須成区会、須成鼓笛保存会
の役員によって構成される須成文化財保護委員会が発足されました。こうして、多くの地域
の方々によって支えられてきた須成祭は、これからも多くの人々の努力によって続けられて
いくことでしょう。



「富吉建速神社・八剱社祭事規則」
明治20年(1887)

富吉建速神社・八剱社蔵

須成祭のみどころ

須成祭は、車楽船行事である宵祭・朝祭が一番のみどころですが、その前後にも、祭りの重要な場면을体感できる行事があります。ぜひ現地へお出かけください。

※時間等は令和6年の行事進行を参考にしています。そのときによって時間が前後することや天候等によって中止になることがありますので、ご注意ください。

■ 蔑刈（よしかり） 7月最終日曜日

午前 7時00分頃 天王橋出発→蟹江川河口

* 手こぎの小さな舟で、白い服の若衆たちが
蟹江川を下っていく姿が見られます。



● 宵祭（よいまつり） 8月第一土曜日

午後 7時30分 宿囃子（須成公民館）

8時15分 祭船が飾橋を出発

55分頃 御葭橋通過

9時10分頃 天王橋到着



● 朝祭（あさまつり） 8月第一土曜日の翌日

午前 9時30分 祭船が飾橋を出発

午前10時20分頃 天王橋到着

30分 天王囃子（神社）

* 「稚児」たちが、船から降りて行列をつくり
神社へ行き、祭囃子を奉納します。



● 御神葭棚（おみよしだな）設置 8月初旬～10月中旬

神社境内に設置された棚に、神葭流しで流された祭りのご神体「御神葭様」が祭られています。静かな情景ですが、これも祭りの一場面です。

参拝して健康祈願をしてみたいはいかがでしょうか。



須成地区への交通案内

- ・ JR関西本線「蟹江駅」下車、徒歩約10分
- ・ 近鉄名古屋線「近鉄蟹江駅」下車、徒歩約25分
＊ 宵祭の時には駅より臨時シャトルバスが出ます。
- ・ 蟹江インターから車で約3分
＊ 宵祭の時には臨時駐車場が利用できます。



須成祭の車楽船行事と神葎流し ガイドブック

発行日 令和7年3月28日

編集・発行 蟹江町歴史民俗資料館

〒497-0040 愛知県海部郡蟹江町城一丁目214番地

TEL・FAX 0567-95-3812